

[資 料]

小学校における新学習指導要領下での保健学習に関する一考察

井筒次郎*・大坪敏郎*・富岡元信*・吉田瑩一郎*

(平成6年10月22日受付, 平成7年1月27日)

A Consideration of Health Education at Elementary Schools under the Course of Study Revised in 1988

Jiro Izutsu, Tosihiro Otsubo, Motonobu Tomioka and Eiichiro Yosida

はじめに

昭和22年の学校体育指導要綱、昭和26年の小学校保健計画実施要領(試案)に基づき展開されてきた小学校の保健学習は、昭和33年に告示された小学校学習指導要領によって、体育科に「体育や保健に関する知識」の領域が新設され、他教科と同様、保健の授業として位置づけられることとなった。「体育や保健に関する知識」の指導時間は、体育の指導時間のおよそ10%程度、すなわち、第5学年、第6学年においてそれぞれ10~11時間、したがって、月1時間ずつ計画的に指導するとよいとされ、学習すべき内容も定められた。

ところが、「授業時間数に比較して内容が多く、しかも副読本は発行されていたものの、検定教科書の制度がないこともあって必ずしも十分な効果を上げることができなかった。」¹⁾と述べられているように、保健学習における教科書の制度化は、より充実した保健学習を展開するための必要条件として、昭和33年当時から期待されたものであった。

健康な生活を営むために必要な初歩的知識を得させることが目指されていた保健学習²⁾は、その後も現場からの強い要望がありながら、昭和42年と52年の改訂において教科書の制度化は実現をみなかった³⁾。しかしながら、平成元年の学習指導要領の改訂に際して告示された「義務教育諸学校教科用図書検定基準」に体育科及び保健体育科が明記されたことによって、小学校体育科(保健)用の検定教科書が供給されることとなった。

第5学年、第6学年を通じて一冊、B5版の場合で32~40ページ、A5版の場合で48~56ページといった制限はあるものの、約20時間の学習に教科書が提供されたことによって、より充実した保健学習が期待できるこ

ととなった。

新学習指導要領の体育科、保健体育科では特に、生涯を通じて健康で安全な生活を送ることができる基礎を培う必要が強調されている。小学校の保健学習における教科書の制度化は、そのための学習内容が具体的に示されることから、効果的な保健学習の指導を可能ならしめるものであるといえる。

本研究は、平成4年度より実施されている新学習指導要領下において、教科書を用いて展開されることとなった小学校における保健学習の実態を把握し、学習指導要領等で示された基準と比較しつつ、より充実した保健学習のあり方を検討する目的で実施されたものである。

方 法

1. 対 象

各小学校の第6学年の学年主任もしくは教頭で、当該学校において過去2年間の保健学習の実情を把握しており、本調査の項目に回答でき得る教員400名を対象とした。

対象校の選定にあたっては、47都道府県より無作為に8ヶ所を抽出し、抽出された各都道府県から系統抽出によってそれぞれ50小学校を選んだ。選定にあたっては平成5年版全国学校総覧を用いた。

2. 方 法

方法は質問紙郵送法である。質問紙は保健学習の実態が単元別に把握できるように構成した。なお質問紙は本論末尾に掲載した。

3. 期 間

調査期間は平成5年12月~平成6年1月である。

* 日本体育大学教職教育Ⅲ研究室

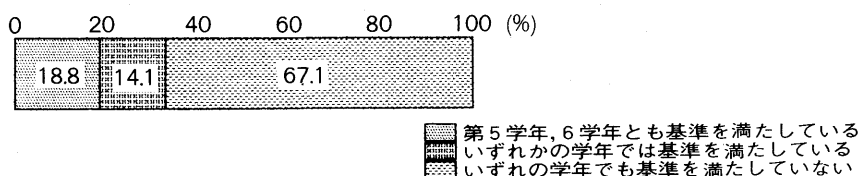


図1 保健学習の年間授業時数

表1 単元別の年間授業時数 (%) (時間)

	0 時間	1～3 時間	4 時間	5 時間～	N.A.	平 均
「体の発育と心の発達」	2.4	35.9	20.4	41.3		4.1
「け が の 防 止」	5.4	53.9	28.1	12.6		3.0
「病 気 の 予 防」	8.4	44.3	18.0	28.1	1.2	3.3
「健 康 な 生 活」	15.6	44.3	14.4	23.4	2.4	2.9

4. 配布数・回収数(率)

配布数は400校、回収数167校、回収率41.8%であった。

結果及び考察

1. 保健学習の年間授業時数

小学校学習指導要領は第9節体育〔第5学年及び第6学年〕の内容の取扱いにおいて、「第5学年及び第6学年の内容の「G 保健」については、各学年の年間授業時数の1/10程度を配当すること。」と示している。したがって、第5学年、第6学年で配当される保健の授業時数は、ともに10～11時間ということになる。

図1は保健学習の年間授業時数の結果を示したものである。

両学年とも10～11時間以上という基準を満たしている学校は18.8%、いずれかの学年では基準を満たしている学校が14.1%、両学年とも基準を満たしていない学校が67.1%と約2/3の小学校で両学年とも保健学習の授業時数に関する基準を満たしていないことが示されている。なお、67.0%のうち35.3%は2年間で10時間以下しか保健学習を展開していない学校である。

体育科の総授業時数の1/10程度が保健学習として配当されていないことは、その時間がA～Fの領域の指導にあてられているということになる。つまり、基準を満たしていない小学校では、体育の学習指導が保健学習以上に重視されていると推察できる。小学校学習指導要領は、第9節体育の指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱いで、「一部の領域の指導に著しく偏することのないよう授業時数を配当すること」と示している⁴⁾。

本調査結果をもって一部の領域、つまり体育の学習指

導に著しく偏している小学校が多いと判断すべきかどうかは、比較資料もないことから明らかでないが、保健学習の授業時数に関する基準を満たしていない小学校が多いという実態は指摘できる。

2. 単元別に見た年間授業時数

保健学習の授業時数が不足している小学校が多いことから、そういった学校においては、当然、各単元の学習量も不足していることになる。

小学校指導書体育編は、「G 保健」の単元は①体の発育と心の発達、②けがの防止、③病気の予防、④健康な生活の4つで構成され、①体の発育と心の発達及び②けがの防止を第5学年で、③病気の予防と④健康な生活を第6学年で指導することを標準とすると示している⁵⁾。

年間授業時数から考えれば、各単元はそれぞれ5時間程度ということになる。たとえば、ある教科書の内容解説資料によると、①体の発育と心の発達を6時間、②けがの防止を4時間、③病気の予防、④健康な生活を5時間ずつとして第5学年、第6学年の年間指導計画例を示している⁶⁾。表1は単元別に見た年間授業時数の結果である。

右端の年間平均授業時数を見ると、予測どおり、いずれの単元も5時間に達していないことが示されている。

仮に基準を各単元それぞれ5時間として考えると、①体の発育と心の発達の単元で基準を満たしている割合がもっとも高いが、それでも5時間をこえて指導している学校は約40%と半数以下であることが示されている。②けがの防止の単元は、基準を満たしている学校の割合がもっとも低い単元であることが理解できる。また、④健康な生活の単元については、まったく指導されない割

表2 授業の実施時期 (%)

	5年	6年	5・6年	授業無	N. A.
「体の発育と心の発達」	66.5	2.4	28.7	2.4	
「けがの防止」	71.2	4.8	18.6	5.4	
「病気の予防」	4.8	69.4	16.2	8.4	1.2
「健康な生活」	3.0	61.1	18.0	15.6	2.4

表3 単元展開の方法 (%)

	毎週続	分割	雨天時	その他	授業無	N. A.
「体の発育と心の発達」	18.0	57.5	10.8	11.3	2.4	
「けがの防止」	21.0	53.9	11.9	6.6	5.4	1.2
「病気の予防」	15.6	55.7	9.0	9.0	8.4	2.4
「健康な生活」	18.6	49.1	5.9	7.8	15.6	3.0

合がもっとも高い単元であることが示されている。つまり、教科書の構成から見れば、後半の単元に指導される割合が低くなっているということである。

単元別に見た授業時数の結果からは、単元によって学習量にばらつきがあること。①体の発育と心の発達の単元以外は、3時間以下でそれぞれの学習指導を終えている学校が半数以上を占めているという実態が明らかにされた。

第5学年及び第6学年の保健の目標は、「体の発育と心の発達、けがの防止、病気の予防及び健康な生活について理解できるようにし、健康で安全な生活を営む能力と態度を育てる」とされている⁷⁾。各単元はそれらを達成するための具体的学習内容であり、示された授業時数は目標達成に必要な量的目安である。しかも、教科書は指導要領に準拠して作成されているわけであるから、各単元の授業時数が基準と大きく掛け離れている場合には、充実した保健学習が展開されているとは判断し難い。

検定教科書が配布され、各出版社よりそれにかかわる教授用資料等も供給されるようになり、より充実した保健学習の展開できる条件が整備されたと考えたが、学習の量的側面に限っては、学習指導要領で示された基準を満たしている小学校が約20%にとどまり、必ずしも十分な時間が確保され保健学習が展開されている学校は多くないことが明らかにされた。

なお、保健学習に関する量的基準に対する考え方は昭和33年の告示以降変わっておらず、教科書が制度化されたことによって各小学校における保健学習の授業時数が以前より減るといった要因も見あたらないことから、こういった実態は教科書の制度化以前からあったと考えられる。このことについて「保健指導に関する全国実態

調査報告書」(1983)は、9時間までの学校が5年生で60.9%、6年生で59.7%あることを示している⁸⁾。したがって、教科書の供給が保健学習の量的側面の充実に好影響を及ぼしているとは判断しがたい。教科書を用いて量的側面を補うほどの質的に充実した指導が行われているかも知れないが、その点については本調査の及ぶ範囲ではない。

3. 各単元の実施時期と展開方法

『小学校指導書 体育編』が、単元とその学年配当を指示した根拠は、小学校学習指導要領の総則第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項で述べられている「各教科等及び各学年相互の関連を図り系統的、発展的な指導ができるようにすること」に基づいている。

また、「保健領域はそれぞれのまとまりを持った内容であり、発展的順序性を持って構成しているため、これらのまとまりを重視して単元を構成することが重要である」こと。したがって、「一つの単元を一定の時期にある程度集中的に継続して取り扱うことができるように工夫することが望ましい」とも述べている⁹⁾。充実した学習指導には集中的かつ継続した指導が望ましいとの示唆でもある。具体的には一つの単元が終了するまで一週間に1時間ずつということが考えられる。

表2には各単元の学習時期を、表3には単元の展開方法について示した。

各単元の学習時期を見ると(表2)、4単元とも約70%の学校で相当する学年において指導されており、指導書に指示された基準を満たしている割合の高いことがわかる。

ところが、表3の単元展開の方法を見ると、「ア. 単元

表4 他教科との関連

(重答 %)

	理科	道徳	学活	学行	家庭	朝帰	特無	その他	授無
「体の発育と心の発達」	67.1	20.4	89.8	—	—	15.6	3.6	1.2	2.4
「けがの防止」	—	10.8	55.7	30.5	—	48.5	6.6	0	5.4
「病気の予防」	17.4	—	53.9	—	22.2	35.3	9.6	3.6	8.4
「健康な生活」	13.2	—	43.1	—	36.5	26.3	10.8	0	15.6

表5 協力授業の有無

(%)

	有	無	授業無	N. A.
「体の発育と心の発達」	41.3	56.3	2.4	
「けがの防止」	12.0	82.6	5.4	
「病気の予防」	17.4	72.5	8.4	1.8
「健康な生活」	7.8	76.0	15.6	0.6

の授業が終了するまで毎週1時間継続して実施」つまり、それぞれの単元を毎週1時間ずつ、5～6時間続けて指導している学校は、いずれも15～20%程度で、むしろ単元を「イ、項目（小単元あるいは中単元）ごとに都合の良いときに分割して実施」している学校が何れも約半数、あるいはそれ以上あることが示されている。

しかも、単元によっては16～28%の学校で第5学年、第6学年にまたがって指導されており、指導書の意図する系統的、発展的指導は必ずしも多くの学校でなされていないことが理解できる。とすれば、表1で見たように、単元の学習時間も不足している学校が多かったこととも考えあわせ、各単元の学習内容も確実に身につけていない場合が多いということになる。

指導書は単元の集中学習を示しているが、実態は分散学習になっている。制度化された教科書に基づく、系統的、発展的指導を制限するどのような地域や学校の実態、生徒の発達段階や特性があるのかについては、今後明らかにされるべき課題である。

なお、④健康な生活以外の3つの単元において、雨天時に指導するとしている学校が10%程度見られるが、これらが系統性や発展性を考慮した計画的指導であると判断することは困難である。

4. 他教科との関連

表4は保健学習と他教科等との関連について示したものである。

①体の発育と心の発達は、「理科などの教科との関連内容」や「学級活動」との関連が配慮される割合の高い単元であることが示され、②けがの防止は「学級活動」や「朝や帰りの会などの日常指導」と関連が図られる場

合の多いことが示されている。③病気の予防、④健康な生活も「学級活動」と関連の図られる割合の高い単元であることが示されている。どの程度の時間、関連が図られているかといった量的側面は不明であるが、単元ごとに他教科や特別活動の学級活動、つまり保健指導や安全指導との関連が重視されていることがわかる。特に、①体の発育と心の発達の単元は約90%の学校で学級活動との関連が考慮されている。

小学校保健指導の手引（改訂版）は、「保健指導は、保健学習で身につけた能力や態度を、当面する身近な健康の問題解決に役立て、常に健康な生活が実践できるようにするものである。」と示している¹⁰⁾。これまで見てきたように、保健学習の量的側面が不足しているという実態から、各単元と関連を図りながら展開されている保健指導も効果的に行われている場合が少ないのではないかと推察される。むしろ、保健指導が保健学習の量的側面を補完する場として機能している場合が多いのではないかとといった点が懸念される。

5. 協力授業の有無

小学校学習指導要領は総則の第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項において、「学校の実態等に応じ、教師の特性を生かしたり、教師の協力的な指導を行ったりするなど指導体制の工夫改善に努めること。」と述べている¹²⁾。

学校保健の分野には、養護教諭のほかに学校医、学校歯科医、学校薬剤師が配置されている。保健学習を充実させるためには、それぞれの単元にふさわしいこうしたスタッフの参加、協力を求めていくことも期待されている。

表6 協力者

(重答%)

	養教諭	学校医	他教諭	警察等	学歯医	学校薬	その他
「体の発育と心の発達」	97.1	0	2.9	—	—	—	1.4
「けがの防止」	70.0	5.0	20.0	40.0	—	—	0
「病気の予防」	89.7	10.3	13.8	—	0	—	0
「健康な生活」	69.2	7.7	23.1	—	0	0	0

表7 協力の内容

(%)

	45分全部	内容を絞って	随時
「体の発育と心の発達」	24.6	50.7	24.6
「けがの防止」	5.0	50.0	45.0
「病気の予防」	13.8	58.6	27.6
「健康な生活」	7.7	84.6	7.7

表8 保健学習のあり方

(%)

現状でよい	43.1
第1学年から系統的に	41.9
特別活動の指導で良し	5.4
理科・家庭科に分散して	1.8
運動の時間に振り替える	0.6
その他	4.2
N.A.	3.0

感できる。

7. 保健学習のあり方について

表8は保健学習のあり方について示したものである。

「現状でよい」とする回答の中には、学習指導要領に示された時間数の基準を満たして「現状でよい」とする場合と、基準を満たしていなくても「現状でよい」とする場合が含まれている。後者はむしろ消極的な考え方にたっていると考えられる。そこで、結果を保健学習に対する3つの考え方に分けて見ることにする。

つまり、①「基準を満たして現状でよい」とする考え方、「第1学年から第4学年についても5,6学年同様教科として系統的に行うべき」とする②より積極的な考え方、そして「基準を満たしていなくて現状でよい」、「特別活動の学級活動における保健指導を行っているので必要と思わない」、「理科、家庭科などに分散して行ったほうがよい」、「保健学習の時間を運動の時間に充てたほうがよい」に回答した③消極的な考え方である。なお、「基準を満たしていなくて現状でよい」と回答した中には、2年間を通じて10時間以下しか指導していない学校が8.9%含まれている。

図2は②より積極的な考えを持っている学校が41.9%、③消極的な考えの学校が38.9%であることを示している。ところが、②より積極的な考えの中身を見ると、そのうちの88.6%が現在基準を満たしていない学校である。したがって、第1学年から保健学習を開始しても系統的に学習する時間の確保ができるかどうかといった不安は残されている。以上のことから、保健学習に対する今後のありかたについて、必ずしも積極的でない学校が多いと実感できる。

表5は小学校の保健学習において協力授業がどの程度実施されているかを示したものである。

協力授業は、①体の発育と心の発達の単元で行われる割合がもっとも高く、約40%を示している。しかしながら、他の単元においてはさほど多く実施されているとは言えない。

仮に各単元に不得手な領域があって指導されていないとするなら、協力授業の実施される割合は他の単元においてももう少し高くなって良いと考えられるが、実態はそうっていない。

6. 協力授業の協力者と協力の方法

表6は協力授業を実施している学校の協力者を、表7は協力の方法について示したものである。

結果は、養護教諭の協力がいずれの単元においてもほとんどであり、外部のスタッフを保健学習への協力者として委嘱する割合は多くないことが示されている。

また、協力方法については、「45分全部を指導してもらう」場合はむしろ少なく、「事前に指導してもらう内容を絞って」といった協力を求める場合が多いようである。

保健学習における協力授業はまだ充実していないと実

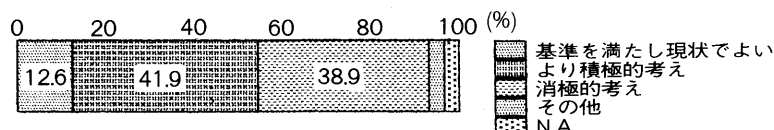


図2 保健学習のあり方

図1あるいは表1で示したように、基準に対して保健学習の不足している学校が多いという実態は、こうした保健学習に対する消極的態度に困っているのではないかと考えることができる。

ま と め

学習指導要領の改訂に伴い、教科書を用いて展開されることになった保健学習の実態を、改訂から2年目にはいった時点で調査によって把握した。結果は以下のようにとまとめられる。

保健学習の量的側面について、学習指導要領で示された基準を満たしていない学校の多いことが指摘できる。そして、その一要因として保健学習に対する学校の消極的態度が推察される。

単元展開の方法について、充実した学習指導には集中的、継続的指導が望ましいとする指導書の意図と、本調査で得られた実態の間には隔たりのある場合が多く、その意図が浸透していない。

保健学習における4つの単元は、ともに保健指導と関連の高いことが明らかにされた。危惧されるのは、学級活動で行われる保健指導を以てよしとすることがないかという点である。

保健学習における協力授業は、まだ十分熟していないといえる。協力授業の多くは養護教諭に依存しているが、1単位時間すべてを任せせる学校は多くない。

教科書の制度化は保健学習の量的側面の充実に好影響を及ぼしているとは判断し難いし、充実した保健学習が展開されている場合が必ずしも多くないという結果が示されている。生涯学習時代における健康と安全の意義に

ついて、それに携わる教師がより認識を深め、保健学習の充実のために初めて供給されることとなった教科書を活用しつつ、基準に則した利用を通して保健学習の充実が図られるべきであると考察する。

謝 辞

本論の作成にあたって、調査票では江東区立第二亀戸小学校養護教諭三木とみ子氏の協力をいただき、集計等については専攻科学生定月千江君の協力を得た。記して謝意を表する次第である。

注 記

- 1) 吉田瑩一郎：『新訂保健科教育法』，教育出版，1991，p. 16.
- 2) 学習指導要領体育編（昭和33年告示）は、小学校の体育科の目標として4番目に「健康・安全に留意して運動を行う態度や能力を養い、さらに保健の初歩的知識を理解させ、健康な生活を営む態度や能力を育てる。」と示している。
- 3) 平成4年度用 検定済教科書『小学保健』（光文書院）の編集の趣意と特色より。
- 4) 小学校学習指導要領（平成元年3月），p. 104.
- 5) 文部省 小学校指導書体育編（平成元年6月）東洋館出版社，p. 7.
- 6) 『小学保健』（光文書院）の内容解説資料，年間指導計画例による。
- 7) 4) 前掲書，p. 101.
- 8) （財）日本学校保健会：保健指導に関する全国実態調査報告書，1983，p. 24.
- 9) 5) 前掲書，p. 81.
- 10) 文部省：『小学校保健指導の手引き（改訂版）』大日本図書，1994，p. 29.
- 11) 小学校学習指導要領，p. 3.

各設問については、該当するものすべてに○印をおつけください。

() 内には該当する数字または内容をお書き下さい。

1. 「体の発育と心の発達」の授業についてお答え下さい。

(1) 授業の実施時期は、どの学年のいつごろでしたか

①学年 ア. 5年生 イ. 6年生 ウ. 5・6年生 エ. 実施していない

※(ア. イ. ウ. の何れかに回答された場合は、「体の発育と心の発達」の以下の質問に回答してください。)

②学期 ア. 1学期 イ. 2学期 ウ. 3学期 エ. 1・2学期

オ. 2・3学期 カ. 1・2・3学期

(2) この単元に配当した授業時数はどのくらいですか。

ア. 1時間 イ. 2時間 ウ. 3時間 エ. 4時間 オ. 5時間

カ. 6時間 キ. それ以上()時間

(3) この単元の授業はどのように展開されましたか。

ア. 単元の授業が終了するまで毎週1時間継続して実施

イ. 項目(小単元あるいは中単元)ごとに都合の良いときに分割して実施

ウ. おもに雨の日を中心に実施

エ. その他()

(4) この単元の授業について他教科等との関連で特に配慮したことは

ア. 理科などの教科との関連内容

イ. 道徳の時間との関連内容

ウ. 特別活動の学級活動における保健指導

エ. 特別活動の学級活動における性の指導

オ. 朝や帰りの会などの日常指導

カ. 特に配慮したことはない

キ. その他()

(5) この単元での学級担任と他の教員などとの協力授業は

ア. 行った()時間 イ. 行わなかった

↓

①誰の協力を得ましたか

③養護教諭 ④学校医 ⑤他の教諭 ⑥その他()

②どのように協力を得ましたか

③45分全部を指導してもらう

④事前に指導してもらう内容を絞って

⑤授業の過程で必要に応じて随時

③協力授業を行った内容は次のどれですか

②体の発育の仕方 発育の男女差・個人差 ⑥体つきの変化 ⑦精通・

初経など体の働きの変化 ④心の発達 ⑤異性への関心 ⑧その他

2. 「けがの防止」の授業についてお答え下さい。

(1) 授業の実施時期は、どの学年のいつごろでしたか

①学年 ア. 5年生 イ. 6年生 ウ. 5・6年生 エ. 実施していない
※ (ア. イ. ウ. の何れかに回答された場合は、「けがの防止」の以下の質問に回答してください。)

②学期 ア. 1学期 イ. 2学期 ウ. 3学期 エ. 1・2学期
オ. 2・3学期 カ. 1・2・3学期

(2) この単元に配当した授業時数はどのくらいですか。

ア. 1時間 イ. 2時間 ウ. 3時間 エ. 4時間 オ. 5時間
カ. 6時間 キ. それ以上 () 時間

(3) この単元の授業はどのように展開されましたか。

ア. 単元の授業が終了するまで毎週1時間継続して実施
イ. 項目(小単元あるいは中単元)ごとに都合の良いときに分割して実施
ウ. おもに雨の日を中心に実施
エ. その他 ()

(4) この単元の授業について他教科等との関連で特に配慮したことは

ア. 道徳の時間の関連内容
イ. 特別活動の学級活動における安全指導
ウ. 特別活動の学校行事の安全に関する行事
エ. 朝や帰りの会などの日常指導
オ. 特に配慮したことはない
カ. その他 ()

(5) この単元での学級担任と他の教員などとの協力授業は

ア. 行った () 時間 イ. 行わなかった

↓

①誰に協力を得ましたか

㊸養護教諭 ㊹学校医 ㊺警察官 ㊻交通指導員 ㊼他の教諭
㊽その他 ()

②どのように協力を得ましたか

㊾45分全部を指導してもらう
㊿事前に指導してもらう内容を絞って
㊽授業の過程で必要に応じて随時

③協力授業を行った内容は次のどれですか

㊾けがの起こり方 ㊿交通事故の防止と安全な行動 ㊽学校生活での
けがの防止と安全な行動 ㊾安全な行動と心や体の調子
㊽安全な環境とけがの防止 ㊿その他